

(経緯) 平成 19 年より高遠のそば在来品種の探索を開始した。地元のそば農家には保管者が見つからない中、茅野の蕎麦仲間である遊楽庵に展示されてあった信州大学 氏原名誉教授のコレクションの中に高遠在来を発見するも譲渡していただけなかった。その後、研究者や研究機関で保管されている可能性を感じ、論文や報告書の検索を行うことにした。

平成 26 年 7 月 15 日

長野県野菜花卉試験場の丸山秀幸研究員が作成した文献に「高遠在来」という名称を発見。丸山氏に連絡を取り、後日拝見しに伺いたい旨を伝え承いただく。

平成 26 年 7 月 27 日

丸山氏を訪ね「高遠在来 (浦)」と記載された茶封筒を確認。20g が保管されていた。このほかに長谷在来が 2kg あることも確認。高遠在来の譲り受けと試験場での増殖を依頼し、承諾いただく。

・ 第 1 回増殖

300 粒播種⇒17 粒出芽⇒6 粒成長 11 粒死滅
(9/18 報告あり) ⇒42 粒収穫 (収穫量 1.3g、
千粒重 31g)

※平成 27 年 5 月 丸山氏が転属となり、後任の
谷口岳志研究員が引き続き増殖を担当

・ 第 2 回増殖 300g 収穫

・ 第 3 回増殖 200g 収穫

平成 27 年 10 月 8 日

後任の谷口氏と面会し増殖の進捗状況を確認。この時にオリジナルの子実も確認 (超小粒：写真)。茶封筒は白封筒に変わっていた。



平成 28 年 5 月 30 日

「現地視察及び第一回耕起」

耕起は雨天のため延期となった。

場所：伊那市長谷 浦集落 (標高：1150m)

江戸時代は「壇ノ浦」と呼ばれていて、平家の落人伝説の残る地域である。

圃場の面積：約 2 畝、東向きに傾斜し、東南側が開けた斜面、西側に林があり、午後 3 時過ぎから日陰、サル・シカなどの野獣が多い、土壌は礫が多く硬く、比較的排水は不良、平成 27 年まで遊休農地。



平成 28 年 6 月 1 日

「第一回耕起」

豆トラで 2 度耕起



平成 28 年 6 月 9 日

「高遠在来 種子受け取り」

長野県野菜花卉試験場で増殖をしていただいた高遠在来が 1 kg となり、その内の 300g を受け取った (写真)。



平成 28 年 6 月 10 日

「播種用の種子選別」

受け取った種子から、播種用に小粒で実の張ったものを選別。(受け取った種子を確認したところ大粒化していたため、オリジナルに近い小粒を選抜して播種することにする)

(写真) 左側が高遠在来種 右側が信濃一号



平成 28 年 7 月 7 日

「第二回耕起及び鹿柵の設置」

市役所職員、そば店 4 軒、信州大学学生等、総員約 20 名で作業 (資材は市役所が用意)。

信大 井上教授が土壌サンプル採取し、持ち帰って土壌分析を実施予定。



平成 28 年 7 月 20 日

「第一回施肥&播種」

土壌分析結果 (左写真) に基づき、井上教授指導のもと、播種と同時に施肥を次のとおり行う。

IBDU 肥 窒素換算合計施肥量 6kg/10a 程度

浦の土壌分析結果

pH	EC	交換性 mg/100g 乾土			mg/100g 乾土 可給態リン酸	%	
		CaO	MgO	K2O		T-C	T-N
6.55	0.124	602	60	85	104	6.39	0.56

IBDU 肥
(N-P-K-Mg)

播種は途中の長雨や干ばつ、暴風などに備え、危険分散のため 1 週間ほど開けて 2 回に分けて実施するとともに、更なる安全策としてポット苗栽培も並行して実施することにした。



平成 28 年 7 月 27 日

「第二回施肥&播種及び除草」

第一回播種の種子は発芽しており、各畝の周辺をクワなどで除草。(写真右端)

第一回、第二回、ポット播種合計で 73g を播種



平成 28 年 8 月 3 日

「ポット苗移植、間引き、中耕」

左から

1 列目 7/20 にポットに播種 8/3 に移植

2～6 列目 7/20 に直播

7～ 列目 7/26 に直播



平成 28 年 8 月 12 日

「中耕・追肥(BB)・培土」

平成 28 年 8 月 16 日

「開花直前に早魃で萎凋」(左写真)

雨が降らず萎凋するも、土寄せを行っていたため、
枯れずに後日無事に復活。



平成 28 年 8 月 24 日

「開花期を迎える」



平成 28 年 9 月 1 日

「登熟期」

多様な虫により受粉

アリ、ハエ、アブ、蜂、蝶 他多種



平成 28 年 9 月 20 日

「登熟後期」

黒化率 80%

黒化が進むと直ぐに葉が落ちる特徴があった。



平成 28 年 9 月 28 日

「収穫」

長雨の合間にあわてて収穫作業

黒化率 95%



収穫種子量 17,665g (反収 88.3kg)

4.4mm 以上	8,969g
4.4~4.2mm	4,137g
4.2~4.0mm	2,742g
4.0~3.8mm	1,160g
3.8mm 以下	657g

※4.0mm 以下のものを次年度の種子として使用



平成 28 年 12 月 6 日

「試食会」

次年度種子に適さない 4.2mm 以上の種子を試食用とし、伊那市市長、信州大学 井上教授、振興会関係者 合計約 20 名で試食会を開催。

『究極の高遠そば』として、「高遠在来」の生粉打ち十割蕎麦、固有種「高遠辛味大根」の搾り汁、「高遠産大豆の手作り味噌」の焼き味噌、江戸時代より栽培されている「般若島ネギ」、高遠伝統野菜「高遠てんとうまぶり」の一味で食す。

試食用のそばは、風味を最大限に残すため、石臼で粗挽きし 16 メッシュでふるった粉で生粉打ちした十割そばと、外殻も最大限挽き込めるように極細挽きにし 60 メッシュでふるった粉で生粉打ちした十割そばの 2 種類を提供。水回しの際には今まで経験したことのないほど強烈な穀物香（スパイス様の香りも混在）が充満した。

ますやさんも 2 種類を提供し、計 4 種類で試食を実施。試食会参加者からは「強いナッツのような風味がした。」「味が濃くてうまい。」と高評価であった。



◇次年度 第二期圃場（左写真 2 枚）

来年は圃場を約 1～2 反に広げ、本格的な種子生産を実施する予定。

2 年後には一般生産の開始を計画しており、今後、生産マニュアルを作成の予定。

◇ 総括（信州大学井上教授より）

高遠在来は日長反応がにぶく、早生の高冷地向き「夏栽培型品種」と考えられる。

通常は受精率が 20～30%、登熟歩合が 70%程度であるのに対し、今回は受精率が 40%、登熟歩合 80%と高かった。

理由として、訪花昆虫が多かったこと、西日が当たらず低温で、呼吸ロスが少ないなどが考えられる。また、追肥したので、開花数が多かったことも収量増加につながった。

本年度は量の確保が主題であり、窒素を多めに施肥したため、本来の物より大粒となった。次年度からは本来の大きさに戻しながら数を増やすための栽培を行う。

